

写真1 国道281号線沿いに連なる白樺の木立

# 平庭高原の 白樺林の景観を 未来につなげるために

## 1 白樺林がピンチ？

久慈市山形の平庭高原の白樺林は、岩手県が全国に誇れる森林景観のひとつと言えるでしょう(写真1)。国道281号線沿いに約4kmにわたって続く白樺林には、三十万本以上と云われるシラカンバの木が生育しています(「白樺」の生物学上の名称は「シラカンバ」となります)。

一見したところ何の問題もなく、美しい姿を見せてくれている白樺林

ですが、その裏側では衰退につながる「高齢化問題」が深刻化しています。

樹木と言えば長寿の印象があり、屋久島のスギのように数千年という長生きをするものもあるのですが、全ての樹種がそんな長い寿命をもっているわけではありません。シラカンバは比較的短命で、その寿命は100年程度とされています。平庭高原のシラカンバの樹齢は50〜80年程度と推定されており、すでに幹の一

部が腐って風や雪で倒れる大木が出てきていますし、このまま放置すればいずれは寿命を迎えて集団で枯死してしまう可能性が高まっているのです。

高齢化した木が寿命を迎えても、その下に世代交代を担う若い木が育っていれば問題はないのですが、平庭高原でそのような若いシラカンバを見かけることはほぼありません。というのも、シラカンバはいわゆる「陽樹」であり、暗い林内では稚樹が育ちません。人が

苗木を持ち込んで植えたとしても、光が十分でないので成長が悪く、成木まで育つのは難しいのが実情です。

このように、平庭高原の白樺林は、喫緊の課題として老齢大径木の折損・倒伏のリスク、そして長期的にはシラカンバの消失による景観激変の危機に直面しているのです。

## 2 白樺林はなぜここにあるのか

そもそも、どうして平庭高原にはこんなに多くのシラカンバが生育し

ているのでしょうか。理由のひとつに考えられるのが、過去の土地利用です。岩手県立大学島田直明先生のグループの研究によると、平庭高原の東側を南北に、平庭岳から明神岳へと連なる尾根筋では、昭和27年頃まで放牧が行われており、草地の維持のため火入れも行われていたと推測されています。その周辺では、しばしば山火事も起こったことでしょうか。また、昭和36年頃に、国道沿い東側で伐採作業が行われたことも確認されています。

シラカンバは、放牧や山火事などで生じた裸地にいち早く侵入・定着する「先駆樹種」のひとつとして知られています。小さく軽いタネは風に乗ってこのような土地に容易にたどり着き、強い光の下で旺盛に発育して一斉林を形成します。平庭高原周辺で繰り返し広がっていた放牧や火入れ、伐採などの人々の活動は、先駆樹種であるシラカンバに繁栄の場を用意しました。新天地で健やかに育ったシラカンバですが、樹林下では光が遮られ、もはやシラカンバの稚樹が育つことはできません。ある場所はササに覆われ、またある場所は樹林下でも稚樹が育つミズナラやブナなどの陰樹が幅をきかせるようになってきます。陽樹から陰樹への

いわゆる「植生の遷移」は、自然本来の姿なのです。

### 3 白樺林の維持・再生に向けて

ここまで述べてきたように、白樺林は裸地を作り出すような人からの働きかけがあつて成立・維持されるものであり、このような人手が加わらなければ陰樹のミズナラやブナの林に変わってしまいます。高齢化し、衰退の危機を迎えている平庭高原の白樺林の景観を維持し、未来につないでいくには、人が適切に関わることで森林の若返りを図ることが必要です。とは言つものの、放牧や火入れといった過去の人間活動をそのまま再現することは、現実問題として不可能です。また、「裸地化が有効」だからといって、むやみやたらと伐採、開墾を行うようなことは、有効性についての科学的な根拠がないばかりでなく、林地保全の面からも受け入れられるものではありません。

平庭高原の白樺林は、地形や気象条件に加え、過去の人々の活動の歴史を反映したユニークな森林です。このような白樺林を維持、管理するための技術には前例がなく、現地での調査やモニタリングなどを通じて確立していくことが求められます。

令和3年4月に、岩手県久慈市と(国研)森林研究・整備機構森林総合研究所は「平庭高原白樺林再生に向けた技術指針の策定」に関する受託研究契約を締結しました。この契約の下、森林総合研究所東北支所では、岩手大学や岩手県立大学とも協働して、平庭高原でシラカンバの天然更新や植栽木の定着・成長を促進する技術について、検討をすすめることとなっています。今年度の研究では、ドローン空撮等を活用した平庭高原の林相分布図の作成、試験区におけるシラカンバ種子の落下状況ならびに小面積皆伐試験区におけるシラカンバの更新に関する調査、過去のボランテア活動により植栽されたシラカンバ幼樹の生育調査に着手しています。また、主要道路沿いのシラカンバ個体の腐朽程度に関する調査も予定しています。

### 4 人とともにある白樺林

我々の研究では、白樺林再生に向けた技術指針を示すことを目指します(図1)。具体的には、平庭高原の環境や様々な条件を考慮した上で、どの程度の面積を伐採し、どの程度地表を露出させれば、シラカンバの侵入や発育を促進できるかについて、明らかにしたいと考えています。

人々の生活が変化し、人手が入らなくなつて自然に変わっていくとする森林で、伐採したり地面を掻き荒らしたりと手をかけて元の姿にしようとすることは、不自然な営みと言えるかも知れません。しかし、それが地域の人々の生業に貢献するものであるなら、不自然ではあつても不必要なことではないでしょう。地

域の景観を維持するため森林に働きかけていくことが、失われつつあつた人と森林のつながりを取り戻すきっかけとなれば素晴らしいことです。

森林総合研究所東北支所

019(641)2150

中村 克典

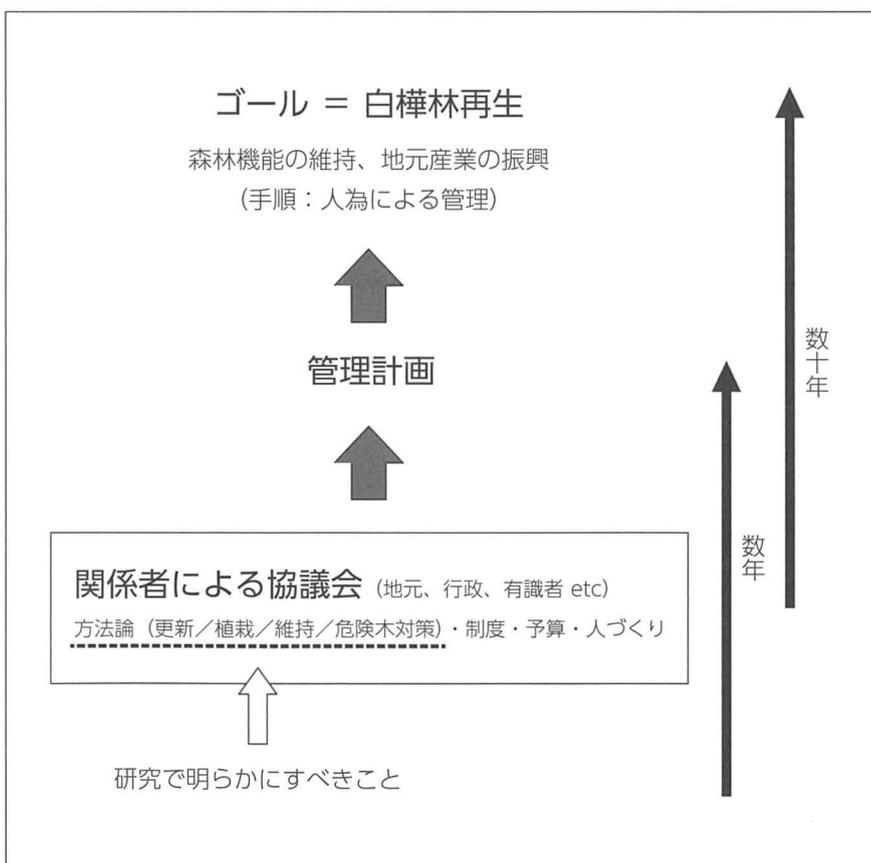


図1 白樺林再生に向けた活動の全体像と、その中での研究の位置付け